

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【 京都府立綾部高等学校 】

1 実践テーマ	【I・III・V】
2 実施対象者	1年生295名（男子129名、女子166名） 卓球部（1・2年生 男女8名） スポーツ総合専攻3年生のソフトボール部男女・硬式野球部 一般生徒（ボランティアバンク登録者）参加者は9名
3 展開の形式	（1）学校における活動 ① 教科名（体育・スポーツ概論） ② 行事名（1年生対象人権教育） ③ その他（放課後の部活動での交流） （2）地域における活動 ① イベント名（あやリンピック） ② その他（ ）
4 目標 （ねらい）	特別支援学校の生徒達とのスポーツ交流を通じて、障がいのある人への理解と共生社会を形成するための思いやりの心を育てる。 パラリンピアンとの講演で、障がいを克服し自分の目標を達成された話を聞くことにより、自己目標達成の為に必要なヒントを得る。
5 取組内容	（1）『1年生対象講演会』 10月25日にリオパラリンピック銅メダリストの山田拓朗選手を迎え、本校倉貫教諭（筑波大学の先輩後輩の関係）とのトークショー形式で講演会を行った。 

・生徒感想文

パラリンピックというとあまり有名で無いイメージを持ってしまっていて、実際、今回講演会に来てくださった山田選手のことでも知りませんでした。しかし、どこに障害があるのか最初分からなかったほど、とても明るくおもしろい方で、パラリンピックへの印象が変わった気がしました。普段、私は障害者に対して同情を感じてしまうのですが、山田選手に対しては、その明るさと世界的な選手に対する尊敬を感じました。講演の中でとても印象的なのが、山田選手が自分に障害がある事に対して「不便は無い」と言っておられたことです。着替えや食事も自力でできると言っておられて驚きました。障害の無い私が、人に頼ってしまうことがよくあると言うことを恥ずかしく感じました。山田選手の明るさや、努力家である面を見習うべきだと思いました。

(2)『中丹支援学校とのスポーツ交流会』

本年度は、卓球とソフトボールという種目での交流会を行った。



卓球の交流



ソフトボールの交流

卓球は本校の卓球部と、ソフトボールは本校のスポーツ総合専攻3年生の男女ソフトボール部と硬式野球部の9名が参加して行った。

・生徒感想文

中丹支援学校で卓球の交流をして、いつもとは違った練習の内容で、ラリーとかを沢山続けることができたので良かったと思います。いつもの部活動なら、自分の卓球練習になるけれど、中丹支援学校に行った時は、卓球を教えるという難しさを自分で知ることができました。卓球を教える時も一つずつゆっくりと丁寧に教えることが大切だと言うことを今回の交流で沢山知ることができました。

短い交流の時間で練習メニューをしっかりすることができ、一回だけだったけど試合をすることができて良かったです。中丹支援学校の人たちと楽しく卓球交流ができて良かったです。

また機会があれば、一緒に練習したいと思います。

(3)『あやリンピックのボランティア』

年齢、性別、障害の有無にかかわらず誰でも参加できるスポーツの祭典「あやリンピック」が、10月29日に綾部市市民センターで行われた。本校からボランティアバンクに登録している生徒の内9名が参加し、競技がスムーズに行われるように気を配りながら参加者と交流を深めた。



(4) 『オリ・パラだよりの作成』

本年度も5月号（第1号）から3月号（第10号）まで毎月オリンピック・パラリンピックに関する内容を掲載し、HR 掲示をして生徒に広報した。

<p>6 主な成果</p>	<p>本年は講演会を始め、多くの障がい者の人との交流の機会を持つことができた。その中で生徒の感想文にもあるように、自分の事としてとらえ、前向きに歩いていくことの大切さを学ぶことができた。 また、共生社会形成の大切さと思いやりの心を育むことができた。</p>
<p>7 実践において工夫した点（事業の特色）</p>	<p>中丹支援学校とのスポーツ交流（ソフトボール）では、本校の生徒はそれぞれの部活動のユニフォームを着用し参加した。そのことにより単なる交流と違い、試合の雰囲気を出してもらって本気モードでの交流会に成るように工夫した。 講演会を本校の先生と講師の先生によるトークショー形式で行ったことにより、生徒にとって聞きやすい講演会となった。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>トークショー形式での講演会では、生徒に対して事前にアンケート等による質問等をまとめておくと進行しやすい。 また、講師と十分な打合せをしておくことがスムーズな進行に繋がりが、生徒の心に入って行きやすい。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>中丹支援学校とのスポーツ交流が続けて行えているので、今後とも計画的に続けられるように、年度当初より連絡を密にして行う。また、障がいスポーツによる交流も行えるようにする。 オリンピック・パラリンピック教育から多くの生徒が色々な事柄を身に付ける機会となるようにしたい。</p>

オリ・パラだより

第4号

綾部高校体育科

平成29年9月1日

大江季雄選手と西田修平選手

同率2位で分け合った「友情のメダル」

1936年のベルリン大会。棒高跳び決勝は、大江季雄、西田修平という二人の日本勢を含む4人の争いとなりました。アメリカのメドウスが4メートル35を跳び、金メダル確定。大江、西田両選手の記録はともに4メートル25でしたが、「日本人同士で争うことはない」と2、3位決定戦を辞退しました。ここまで5時間以上に渡る大接戦で、二人とも疲れ果てていたのです。日本側は、先にクリアした年長の西田を2位、大江を3位と届け出て、これが公式記録として認められました。競技翌日の表彰式では、西田は後輩である大江に2位の表彰台に立つよう指示しました。「次の東京大会で頑張してほしい」という激励の気持ちからだだったといえます。帰国後、二人は銀と銅のメダルを半分に割り、つなぎ合わせたメダルに作り直しました。しかし、1940年東京大会は第二次世界大戦のために中止。大江は41年にフィリピンで戦死しました。二人の思いは戦争によって断たれてしまいましたが、つなぎ合わせたメダルは「友情のメダル」として今も人々の記憶に刻まれています。

フェアプレーとは、「(1) 運動競技で、正々堂々たるふるまい。(2) 公明正大な行為・態度。」です。スポーツにはルールがあり、そのルールを守ることでアスリートが互いに競い合い、高めあう。それがスポーツマンシップであり、オリンピズムの一つです。

『オリンピック精神は友情、連携そしてフェアプレーに基づく相互理解が必須である』～オリンピック憲章「オリンピズムの根本原則」より～



大江季雄氏の友情のメダル



大江季雄選手は現在の西舞鶴高校の出身です。西舞鶴高校のグラウンドの横(体育館の前)に大江選手の銅像があります。今度、西舞鶴高校へ行く機会があったら是非見てきてください。



オリンピックには多くのエピソードがあります。今回のように良いものもあれば、そうでないものも・・・



TOKYO 1964

東京大会



札幌大会



長野大会

過去、日本では1回の夏季と2回の冬季のオリンピックが開催されています。2020年東京大会では、どんな感動が生まれるか楽しみです。皆さんも何らかの形で関わって欲しいと思います。

次は、オリンピックのフェア精神と相反するドーピングについての話です。

ドーピングとは、スポーツ選手が試合に際し薬物を使用すること。スポーツ精神の立場と医学上の立場から、特にヨーロッパで薬物使用が問題とされ、1960年ローマ・オリンピック競技大会でデンマークの自転車選手がドーピングのために死亡した事故がきっかけとなって1968年グルノーブル・オリンピック冬季競技大会から正式にドーピング検査が行なわれるようになった。薬物使用者は出場停止または失格となる。禁止薬物には、交感神経作動アミン、中枢神経刺激剤(→中枢興奮剤)や麻薬鎮痛剤(→鎮痛剤)、蛋白同化ステロイド(→蛋白同化ホルモン)、利尿剤などがある。1988年ソウル・オリンピック競技大会でカナダのベン・ジョンソンが陸上100m競技で金メダルを獲得したものの、競技後のドーピング検査でアナボリック・ステロイド(筋肉増強剤)が検出され失格となって、世間の関心を集めた。

一方で禁止薬物の成分は風邪薬などにも含まれており、知らずに服用して問題となる例もある。もとは競馬において、よい成績を上げるために競走馬に与える薬物をドーブというところから用いられ始めたことばである。

2020 東京オリンピック・パラリンピックのドーピング対策について

2020年東京五輪・パラリンピックに向けたドーピング防止対策を強化するため、日本スポーツ振興センター(JSC)が5月に違反の内部告発のための通報窓口を設けることになった。超党派のスポーツ議員連盟も、国内初のドーピング防止法案を今国会に提出して、18年度の施行を目指すことにした。開催国として厳格な姿勢を示し、1000人を超えるロシアの組織的なドーピング違反の発覚で価値が低下した五輪をクリーンな大会とアピールする狙いがある。

通報は電子メールに限られ、匿名でも可能。対象は日本オリンピック委員会(JOC)と日本パラリンピック委員会(JPC)の強化指定を受けるようなトップ選手だ。ドーピングは支援者の影響が大きいことから、コーチや強化スタッフとなる一部の医師も対象に含める。

ドーピング違反は巧妙化して検査結果だけでの摘発は限界にきている。ロシアの違反発覚も、内部告発がきっかけで、情報を積み上げて摘発する狙いを定める「インテリジェンス」と言われる手法が重視されている。これまで五輪で違反者を出していない日本にはなじまないが、JSCは「抑止力を高めるためにも、相互けん制の仕組みは必要だ」と強調した。

国際オリンピック委員会(IOC)のバッハ会長が昨秋に来日した際、安倍晋三首相に「20年東京五輪をもっともクリーンな大会にしたい」と支援を要望した。スポーツ議連の法案はドーピング防止がスポーツ界のルールではなく、国として違法と位置付けることを意味する。